

半過去を支える解釈領域 — 視野狭窄の半過去を中心に

L'imparfait et domaine d'interprétation

— rétrécissement du champ visuel —

東郷 雄二 (Tôgô Yûji)

Cet article a pour objectif de montrer que la prise en considération du domaine d'interprétation est cruciale pour l'explication des divers emplois de l'imparfait. La notion de domaine d'interprétation a été proposée par Cannings (1998) et Recanati (1996) pour expliquer le fonctionnement de l'article défini. Nous croyons que cette notion est applicable aussi aux temps verbaux. En nous appuyant sur Vogeleer (1994), nous distinguons l'imparfait épistémique, qui n'implique pas le déplacement du point de vue et l'imparfait perceptuel, qui le déclenche. Dans le dernier cas, le domaine d'interprétation se trouve réduit au minimum, entraînant le rétrécissement du champ visuel. Nous montrerons que c'est la raison pour laquelle dans une suite de phrases telle que *J'ai pris le métro. Une fille { engueulait / \*a engueulé } son copain.*, l'emploi du passé composé est peu heureux.

キーワード: 半過去 (imparfait), 認識的半過去 (imparfait épistémique), 知覚的半過去 (imparfait perceptuel), 解釈領域 (domaine d'interprétation), 視野狭窄 (rétrécissement du champ visuel)

### 1. はじめに

伝統的に半過去は始点と終点を明示しない未完了過去であり, 文脈が提供する時間的な基準点との同時性を表すと説明されることが多い. 次のような教科書的な半過去の用法はこれで説明できる.

(1) Paul entra dans la cuisine. Marie *faisait* du café.

一方, このような伝統的な半過去の規定では説明できない用例が多く存在する

こともつとに指摘されてきた。本稿ではおびただしい数にのぼる半過去をめぐる論考のなかで、あまり注目されてこなかった問題を取り上げる。前島 (1997) が提起した次の問題である。

(2) J'ai tourné la chaîne. Un flic { tirait / ??a tiré } sur une bagnole qui { prenait / ??a pris } feu. Sur une autre chaîne, l'OM { marquait / ??a marqué } son quatrième but. Sur la dernière, une grosse femme { engueulait / ??a engueulé } son bonhomme.

(3) J'ai pris le métro. Une fille { engueulait / \*a engueulé } son copain.

(4) J'ai pris le métro. Il y avait un bonhomme qui écrasait le pied d'une jeune fille. Elle a engueulé le bonhomme ! Elle criait tellement fort que l'autre a été obligé de changer de wagon.

前島によると(2)(3)では半過去しか用いることができない。(2)でもし *Un flic a tiré sur une bagnole...*のように複合過去を用いると、テレビの中の出来事であるというニュアンスが失われ、極端に言えばテレビを見ていたら戸外で警官が発砲したという意味に取られてしまうという。また(3)と(4)を較べてみると、(3)では半過去しか用いることができないのにたいして、(4)では同じ動詞を用いた複合過去がまったく自然だという。

この容認度の差は未完了というアスペクト価値や、基準点との同時性という伝統的な半過去の規定で説明することができないのは明らかである。たとえば(3)を例にとると、[une fille – engueuler – son copain]<sup>1)</sup>という事態が未完了として表現され *J'ai pris le métro.* が表す出来事と同時的とされなくてはならない理由は見あたらない。その証拠に(4)では同じ動詞が複合過去に置かれている。

半過去を部分照応を行う時制 (*temps anaphorique méronomique*) とする Berthonneau & Kleiber (1993)の分析でもこれを説明することは難しい。彼らの分析の難点は、半過去が何かの部分を表すことを認めたとしても、その「何か」がどのように規定できるのかがよくわからない点である。部分照応説を(2)に素朴に適用すると、*Un flic tirait...*以下の半過去が表す状況は、冒頭の *J'ai tourné la chaîne.* という文が表す状況の部分になすことになるが、それは意味をなさない。何より *Un flic tirait...*以下がテレビの中の場面と解釈されることを説明できない。

同様に(2)(3)を絵画的半過去と見なすのも難しい。そもそも絵画的半過去は、語りにおいて本来ならば単純過去を用いる所を半過去で表す修辭的な時制の用法である。

---

<sup>1)</sup>[ ]で括ったものは時間軸に定位される以前の事態を表す。また動詞の表す状態・出来事をフランス語学ではよく「事行」(*procès*)と称するが、本稿では一貫して「事態」を用いる。

(5) Il se mit à genoux et lentement, il la *dévêtait*, ayant commencé par les bottines et par les bras, pour baiser les pieds.

(Maupassant, *Le mal d'André*)

絵画的半過去は常に単純過去で置き換え可能である (Vetters 1996). (5)の半過去を *il la dévêtit* と単純過去にしても何の問題もない. この点で Benveniste の言う *discours* の位相における単純過去の代替物である複合過去にすることができない (2) (3) と決定的に異なる.

(2) (3)で複合過去を用いることが難しい理由を前島 (1997) は概略次のように説明している. 原文のままではわかりにくいので, 本稿筆者に理解できた範囲での要約で示す.

鍵となる概念は「話し手」「状況」「状況との交渉」である. 状況には2種類ある. 話し手と交渉のある状況とない状況である. 交渉のある状況では話し手はその状況の内部に含まれる. 交渉のない状況では話し手は内部に含まれない. 話し手が初めて遭遇した状況は後者の典型的なケースである.

事態の成立・不成立を表す複合過去は, 話し手が状況の中にいることを前もって示していなければ使うことができない. すなわち複合過去の使用には話し手と状況との交渉が成立していることが条件となる. 一方, 半過去は事態の成立・不成立に関して中立である. 話し手が状況の内部に含まれないとき, 事態が進行中であるか終了しているかを問わず半過去が用いられ, そのとき半過去は事態の成立を表す. 半過去のこのような特性は半過去が3人称界<sup>2)</sup>を表す時制だからである. ただし, 話し手が1人称のときは, 話し手が常に状況の中心にあるため複合過去を問題なく用いることができる.

(3)で複合過去を用いることができないのは, [une fille – engueuler – son copain]が初めて遭遇した事態であり, 話し手と状況の交渉が成立していないためである. (4)で複合過去を用いることができるのは, その前の文によって話し手と状況との交渉が成立しているからである. (2)で複合過去を使うことができないのは, 複合過去が最初の *J'ai tourné la chaîne*. とは独立して独自に事態の定位を行うためである.

前島 (1997)を取り上げた小熊 (2002) は前島の分析に賛同し, かといって3人称が常に半過去というわけではなく, 1・2人称が半過去を拒否するわけでもなく, 「発話者が対象事態の置かれている状況に『内属』するかどうか, 言い換えれば発話者が発言主体として積極的に事態に関わっているか, それとも単な

---

<sup>2)</sup>「3人称界」という用語を前島は定義なしに用いているので, その意味するところは定かではない. 前島の依拠する Culioli の *Théorie des opérations énonciatives* の「断絶」(rupture) という概念と関係があるのではないかと思われる.

る傍観者として留まるかが問題なのである」(小熊 2002:144)と要約している。

複合過去・半過去の選択関係と人称との関連を指摘した前島の分析は興味深い  
が、今ひとつその論旨がはっきりしないうらみがある。少なくとも本稿の筆  
者には十分に理解できるものではない。また Tasmowski (1985)が指摘する次  
の例は前島の理論でどのように説明できるのかという問題も残る。

(6) *Qu'est-ce qu'il pleuvait, n'est-ce pas ?*

「たいへんな雨でしたね」というこの発話は、雨が降った時に共通の活動に従  
事してその記憶が鮮明な知り合い同士の発話としては自然だが、よく知ら  
ない人同士の会話としては不自然で、そのときは *Qu'est-ce qu'il a plu,*  
*n'est-ce pas ?*のように複合過去を用いなくてはならないという。前島の理論だ  
と (6)で話し手は [il-pleuvoir-beaucoup]という事態の内部に含まれず傍観者  
の立場にいないことにならないことになるが、これは話し手と聞き手の体験共有  
が半過去には必要だとする Tasmowski の分析とは逆方向になる。

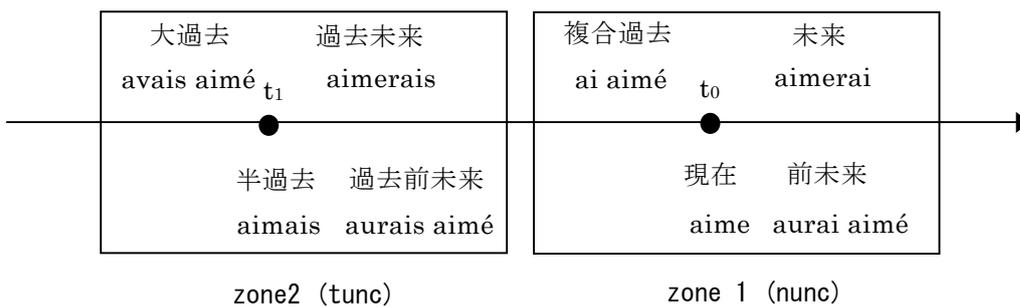
本稿では (2) – (4) の複合過去と半過去の選好現象を前島 (1997)とは異なる  
角度から分析してみたい。その際に鍵となる概念は「解釈領域」である。

2. フランス語時制の全体像と2つの半過去

2. 1. フランス語時制の全体像

本稿の筆者は東郷 (2007, 2008, 2010, 2012)においてフランス語時制  
の全体像を提示した。これらの論文の内容と一部重複するが、以下の議論で必  
要な前提となるのであらためて示しておく。

(7) フランス語時制の全体像



上の図式には次のような意味がこめられている<sup>3)</sup>。

(A) zone 1 は発話時現在  $t_0$  を中心とする時制であり、話し手が  $t_0$  に視点を置いて捉えた事態を表す。zone 2 は過去のある時点  $t_1$  を中心とする時制であり、過去への視点移動を伴う用法では  $t_1$  に視点を置いて捉えた事態を表す。

<sup>3)</sup> (7)の図式の意味することのうち本稿の内容に関連するもののみを挙げた。詳しくは東郷 (2007, 2008, 2010, 2012)を見られたい。

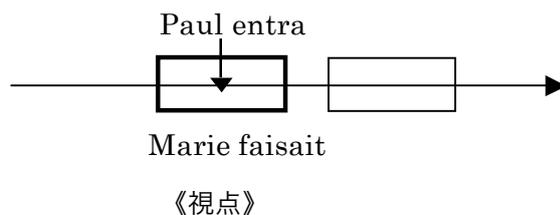
- (B) zone 1 を時間軸に沿って過去に移動させると zone 2 を得る. つまり zone 2 とは過去にずらされた zone 1 である.
- (C) zone 1 と zone 2 とは断絶している. その断絶は事態そのものの断絶であることも, 話し手による事態認識の断絶のこともある.
- (D) 単純過去と前過去は上の図式に入らない. 上の図式は発話時現在を基点として組織化される時制を表しており, 単純過去・前過去は発話時現在が関わらない時制であるからである. 語りなどで単純過去の代用として用いられた複合過去も同様である. (7) の zone 1 に置かれている複合過去は, *Tu as toujours été gentil avec moi.* のように, 発話時現在の地続きの事態を表す複合過去に限られる.
- (E) 上の図式は単にフランス語の時制を 2 つのグループに分類したものではなく, 話し手・聞き手が時制を用いたり解釈したりする際に発動される心的なスキーマである.

## 2. 2. 2つの半過去 : imparfait de récit / imparfait de discours

本稿の筆者はこの図式に基づいて東郷 (2007) でふたつの半過去を区別する必要性を指摘した. Le Guern (1986) が Benveniste のよく知られた *histoire (récit) / discours* というふたつの発話態度を援用して提案した *imparfait de récit / imparfait de discours* という区別を踏襲したものである<sup>4)</sup>.

### (8) imparfait de récit

Paul entra dans la cuisine. Marie *faisait* du café.



上の図は(7)の図を模式的に表したものである. 左の zone 2 の四角形が太線で描かれているのは zone 2 が発動されていることを表す. 「発動されている」とは話し手・聞き手の頭の中でスキーマが活性化されて文の意味解釈に利用されていることをいう. 右の zone 1 の四角形が細い線で描かれているのは zone 1 が発動されず背景化されていることを表す. 背景化とはいつでも前面に出て発動可能だが, 一時的に不活動状態となっていることをいう.

(8)の意味解釈はおおむね次の手順をたどる. まず第 1 文 *Paul entra dans la*

<sup>4)</sup> *imparfait de récit / imparfait de discours* を説明する際に用いる例は Le Guern (1986) と東郷 (2007) とも異なっている. 説明をわかりやすくするためである.

cuisine. の単純過去形によってこの文の表す事態 [Paul – entrer – dans la cuisine]は時間軸上の点  $t_1$  に定位される<sup>5)</sup>. 単純過去形は単独で事態を定位する力を持つ. 次に  $t_1$  を中心として zone 2 が形成される. このとき zone 2 はメンタル・スペース的な意味での過去スペースと考えるとよい. 次に視点が zone 2 へ移動する. zone 2 が活性化されると同時に zone 1 が背景化される. 第 2 文 Marie faisait du café. はこのようなスキーマ状態で解釈される. このとき半過去形 faisait は  $t_1$  に視点を置いて観察された未完了の事態, すなわち伝統的な言い方をすれば過去の時点において継続中・進行中であった事態を表す. 半過去形は事態を内側から眺める「内的視点」を持つと言われるが, 上の図はそれを表現している.

一方 imparfait de discours は次のようになる.

(9) Son mari *était* musicien, mais il ne l'est plus.



(8)の図とは異なり, (9)の図では zone 1 も zone 2 も太線で描かれており, 両方とも同時に発動されていることに注意されたい. これが imparfait de récit と imparfait de discours を分かつ最も大きなちがいである.

(9)は次のような経路で意味解釈される. 話し手(聞き手)の視点は発話時現在  $t_0$  に終始置かれている. 第 1 文 Son mari était musicien. によって, 視点を zone 1 においたまま過去領域に zone 2 を開く. zone 2 は現在から見て過去というだけの特性を持つスペースであり, (8)とは異なり, 特定の過去時点  $t_1$  を中心に形成されているわけではない. 現在とは何らかの意味で断絶した過去であればそれでよい. 第 1 文の半過去形 était は zone 2 において成り立つ事態として解釈される. 次に第 2 文 mais il ne l'est plus. は現在形が用いられているので, 通常どおり zone 1 において解釈される. このように [son mari – être – musicien] という事態が zone 2 において成り立ち, zone 1 において成り立たないことから, 過去と現在の対比という意味が生じる.

「半過去は基準点との同時性を表す」というテーゼに Sten (1952), Le Bidois & Le Bidois (1935-38)らは反対し, 同時性を表さない半過去の用例を多数挙げたが, それらはすべて本稿でいう imparfait de discours の例である.

(10) Hier ils nous *faisaient* la causerie, à présent ils se cachent. (Sartre,

<sup>5)</sup> 定位とは文の表す事態が時制などの働きによって時間軸上に位置づけられることを言う.

*Mort*, Sten 1952 に引用)

(11) *Naguère Stamboul s'appelait Constantinople. (Le Bidois & Le Bidois 1935-38)*

また阿部 (1987)が半過去形は単純過去や複合過去だけでなく、様々な時制との組み合わせで用いられると指摘する用例も、すべて *imparfait de discours* と見なすことができる<sup>6)</sup>。

(12) a. *Shinji était maintenant tout à fait différent du garçon qu'il était trois mois auparavant.*

b. *La dynamo qui était en panne depuis longtemps avait été réparée.*

(8) (9)の例文と図式によって2種類の半過去を区別すべきとする論旨を示したが、だからといって性質や働きが異なる半過去形が2つあると主張しているのではない。半過去形の基本的意味価値はただ1つで、それは伝統的に言われている「未完了過去」としておいて大きなまちがいはない。本稿の筆者が現在までに書いた時制に関する論文で一貫して明らかにしようとしたのは、「時制とは優れて談話的現象であり、時制の働きは談話の中で理解しなくてはならない」ということである。

話し手と聞き手は相互行為によって談話を構築し理解する。時制を用いたり解釈したりするときには(7)で示した心的スキーマが発動されて談話が進行する。半過去形は1つであるが、それを解釈するときが発動されるスキーマの状態が *imparfait de récit* と *imparfait de discours* とで異なるだけである。*imparfait de récit* では zone 2 のみが発動される。*imparfait de discours* では両方の zone が活性化する。しかしいずれの場合も半過去は zone 2 において成り立つ未完了の事態を表すという点は同じである。(8) (9)の図式が表す半過去の談話的分析には、半過去の一体性を保持しつつ多様な用法を説明できるという利点がある。

### 3. 解釈領域

次に談話における文の意味解釈には、その文が解釈される領域が必要であるということを見よう。管見の及ぶ限り文の意味解釈における領域の重要性を初めて具体的に定式化したのは Cannings (1978) である。Cannings は(13 a)がサンタクロースの存在を言明する文と解釈できるのに、なぜ(13 b)がそのように解釈できないのかという問題を考察した。つまり *il y a* 存在文における定冠

---

<sup>6)</sup>(12 a) (12 b)の例では時制の一致が起きているため(8) (9)の例よりも複雑になっている。詳細は東郷 (2012)を見られたい。

詞の問題である。

(13) a. Il y a un Père Noël.

b. Il y a le Père Noël.

Cannings の議論を手短にたどると次のようになる。一般に文  $S$  の意味解釈には領域  $W_x$  が必要であり、文の意味解釈は  $\langle S, W_x \rangle$  という順序対で表現される。たとえば *Un castor fait des barrages.* という文には *un castor* の総称解釈と特定解釈の2つの意味がある。総称解釈ならば「ビーバーは(一般に)ダムを作る」を意味し、特定解釈ならば「(ある特定の)ビーバーがダムを作る / 作っている」という意味になる。この意味のちがいは名詞句 *un castor* に全称量化がかかるか存在量化がかかるかという量化操作のちがいとして分析されることが多い。Cannings のユニークな点はこの意味のちがいを解釈領域の差と捉えた点にある。総称解釈では解釈領域  $W_x$  は世界全体であり、特定解釈では文脈的な制限を受けた狭い時空間である。Cannings はこの  $W_x$  を「関与的領域」(domain of relevance)と呼ぶ。

また Recanati (1996) はやはり定冠詞の意味解釈をめぐる議論の中で、「談話領域」(domain of discourse) の重要性を指摘した。分析哲学でよく議論の的となる *Close the door.* のような不完全定記述が、定冠詞は指示対象の唯一性を表すという Russell が提唱した古典的分析にたいする反例となるかどうかという考察の部分である。

Thus I say “Close the door”, knowing full well that there is more than one door in the universe. Does this object to Russell’s analysis of descriptions? Not if we accept the notion of a contextually restricted domain of quantification. If we do, we can say that the uniqueness condition *is* satisfied — not in the world, but in a relevant portion of the world. The latter is the domain of discourse for incomplete descriptions.

(Recanati 1996 : 446)

つまり *the door* は「世界にひとつしかないドア」を意味するのではなく、話し手と聞き手がいる部屋という文脈的に限定された空間領域において、開いたままになっている唯一のドアを意味するのである。この domain of discourse は従来からモデル理論的意味論においても談話空間 (universe of discourse) として提案されている概念に近いが、談話空間がモデルの一部をなす个体領域と単純に理解されていたのにたいして、Recanati はそれをさらに一般化し、文脈的に暗黙の量化が起きる場合も含めて考えている<sup>7)</sup>。

---

<sup>7)</sup> 筆者が行なった日本フランス語学会例会での発表の後で、坂原茂氏から「文脈的あるいは語

Cannings も Recanati も定冠詞の意味論を考察する際に解釈領域が必要であることを論じたのだが、彼らの洞察を一般化して時制にもまた解釈領域が必要だというのが本稿の主張である。このことはかんたんな例で確かめることができる。

(15) *Je n'ai pas pris mon petit déjeuner.*

(16) *Je ne suis jamais monté sur le mont Fuji.*

(15)の複合過去の解釈領域は今日一日だが、(16)では私の一生全体である。私たちは文の意味解釈においてこのように適切な解釈領域を探し出して解釈しているのである。談話という観点から時制を考えるには、このように談話の意味構築に欠かせない解釈領域を考慮する必要がある。

#### 4. Vogeleer (1994)の再検討

本節では Vogeleer (1994) の時制論を批判的に検討し、Vogeleer の主張を本稿の依拠する枠組みで捉え直すとするようになるかを見てみよう。

Vogeleer (1994)はまず現在時制に2つの用法を区別する。認識的現在 (*présent épistémique*)と知覚的現在 (*présent perceptuel*)で、それぞれの用例が (17 a) (17 b)である。

(17) a. *Jean travaille chez Renault.*

b. *Jean regarde (=est en train de regarder) la télévision.*

(17 a)は習慣的事態を表す現在で、(17 b)は発話時現在に起きている事態を表す現在である。Vogeleer は独自の意味関数を用いて形式的に分析しているが、ここでは同じことを解釈領域という装置を用いて考えてみたい。

(17 a) も(17 b)も現在形が用いられているので、図(7)に当てはめて考えると、ともに zone 1 において成立している事態を表す。しかし現在形が解釈される領域が異なる。ジャンはしばらく前からルノー社に勤めているだろうし、辞めなければ今後も勤務し続けているだろう。また発話時現在においてジャンが休暇中で海辺で遊んでいても (17 a)は真である。つまり (17 a)は発話時現在  $t_0$  に限定されることなく  $t_0$  を中心とする広い解釈領域を持つ。(17 a)は知識表現であり、視点が  $t_0$  にあることは大きな意味を持たない。一方、(17 b)は知覚表

---

用論的に談話領域がただ一つの指示対象しか含まないまでに狭められているとしたら、もはや指示対象の同定は可能であり、定冠詞句 *le N* によって指示する必要はないのではないか」という批判が寄せられた。この批判に対しては次のように答えたい。定冠詞 *le* は指示詞 *ce* のように積極的な指示力を持たず、存在前提を伝達するだけである。宅配便の不在配達通知が「荷物が届いていますよ」と伝えるように、定冠詞は文脈・状況的にアクセス可能な領域に指示対象が存在することを聞き手に伝達する。聞き手は談話的な手掛かりをもとに関与的な談話領域にアクセスし、*le N* の表す指示対象に到達するのである。

現であり、 $t_0$ において成り立つ事態を表す。このとき視点が $t_0$ にあることは大きな意味を持ち、(17 b)は $t_0$ という狭い解釈領域で解釈される。このように解釈領域が狭く限定されることを本稿では視野狭窄と呼ぶ。少し空けた襖の隙間から向こう側を覗いている状態をイメージしてもらえればよい。

Vogeleer (1994)は半過去にも同様の分析を行なう<sup>8)</sup>。

(18) a. *Jean travaillait chez Renault.*

b. *Jean regardait (=était en train de regarder) la télévision.*

(18 a)が認識的半過去 (*imparfait épistémique*)であり、(18 b)は知覚的半過去 (*imparfait perceptuel*)である。図(7)に当てはめてみると、(18 a)は zone 2 において成り立つ事態を表すが、過去の時点 $t_1$ に限定されない広い解釈領域を持つ。(18 a)の最もふつうの解釈は *imparfait de discours* で、このとき zone 1 と zone 2 の両方が発動され、今ではジャンはルノー社に勤めていないという含意を生む。一方、(18 b)は過去の時点 $t_1$  (たとえば私が居間に入った時点)における知覚表現で、視野狭窄効果を伴い狭い解釈領域において解釈される。zone 2 のみが発動される *récit* の半過去である。

Vogeleer (1994)は(18 a)のタイプの半過去を単純型認識的半過去 (*imparfait épistémique simple*)と呼び、次のような包括型認識的半過去 (*imparfait épistémique global*)と区別する。

(19) *Il y a longtemps, dans un pays, il y avait un roi.*

認識的半過去の単純型と包括型を本稿の依拠するモデルによって分析すると次のようになる。単純型の(18 a)が *discours* の半過去でふたつの zone を発動させ、その結果として文は話し手である「私」の知識表現を表すのにたいして、包括型の(19)は *récit* の半過去で zone 2 のみが発動される。この分析では(18 b)と(19)の両方とも *récit* の半過去と見なすことになるが、そのちがいは解釈領域の差で説明することができる。(18 b)では zone 2 への視点移動と視野狭窄が起こり、 $t_1$ に限定された狭い領域で解釈される局所的な知覚表現である。一方、(19)では zone 2 への視点移動は起こらず、時間表現 *il y a longtemps* と空間表現 *dans un pays* によって設定された過去スペース全体を領域とする知識表現だと言える。

## 5. 情報のアクセスポイントと事態の状態性

前節までで Vogeleer (1994)に従って、知覚的半過去、認識的半過去(単純型)、認識的半過去(包括型)の3種類の半過去のちがいを見た。これらはふたつの

---

<sup>8)</sup> しばしば言われるように半過去とは過去にずらされた現在形であるので、現在形に対する分析を半過去に適用するのは妥当な拡張であると考えられる。

zone が発動されるのかそれとも zone 2 のみが発動されるのか、また視点の移動と視野狭窄を伴うかどうかで区別されることを論じた。しかしいずれの場合においても、話し手（および聞き手）が過去スペースに設定された解釈領域にどのように心的にアクセスして意味を解釈するかという問題が残されている。Vogeleer (1994)もこの問題には触れていない。すでに述べたように、本稿は時制を談話構築という観点から考察する立場を取り、図(7)は単なる時制の分類を示したのではなく、時制解釈の時に発動される心的メカニズムを表現している。したがって、図(7)を時制の有効な説明原理とするためにも、過去スペースに心的にアクセスし情報を得る機序についても考察しなくてはならない。

定延 (2004) は、何らかの情報を言語で表現するときには、話し手はその情報を脳裏に浮かべる必要があり、そのために話し手は心内でその情報にアクセスしなくてはならないとする。アクセスするときの時間軸上のよりどころを「情報のアクセスポイント」と呼ぶ。定延は次の例を用いてこの概念の有用性を示している。(20)はタイムマシンで 600 年前の世界に行ってピサの斜塔に住もうと提案している状況での発話である。

(20) a. そりゃいいや！ 600 年前ならピサの斜塔も新しいからね。

b. そりゃいいや！ 600 年前ならピサの斜塔も新しかったからね。

定延によれば(20 a)が自然で(20 b)が不自然なのは、日本語のタが情報のアクセスポイントが過去にあることを表すからだという。「600 年前ならピサの斜塔も新しい」は知識表現であり、世界史的知識として現在時からアクセスできる。ところが「600 年前ならピサの斜塔も新しかった」は情報のアクセスポイントが過去にあることを表すため、600 年前の過去に遡って情報を取得しなくてはならない。(20 b)がまるで 600 年前のピサの斜塔を実際に見て来た人の発話のように響くのはこのためである。

定延の「情報のアクセスポイント」という概念を借用し、これを図(7)に当てはめて考えてみよう。zone 1 の中心にある発話時現在  $t_0$  はデフォルトで情報のアクセスポイントとして働く。Jean travaille chez Renault. のような知識情報も、Jean regarde (=est en train de regarder) la télévision. のような知覚情報も  $t_0$  からのアクセスによって取得したり表現したりすることができる。一方、zone 2 で成り立つ事態を表現する半過去の場合はより複雑である。まず(18 a)のような単純型の認識的半過去では視点の移動は起こらず、話し手（聞き手）は zone 1 に留まったままなので、zone 2 へのアクセスは必要ないと考えられる。同じく知識表現である(19)の包括型の認識的半過去でも事情は同じである。これにたいして(18 b)のような知覚型半過去では zone 2 への視点の移動が起こり、過去スペースへの心的アクセスが起きると考えなくてはならない。

ここで問題は過去スペースへの心的アクセスにどのような制約がかかるかという点である。田窪 (1993) は日本語のタラ条件文をめぐって興味深い議論を展開している。田窪は (21 a) (21 b) のように非状態性動詞 (運動動詞) に「たら」を付けると、仮定的状況も確定的状況も表すことができるが、(21 c) (21 d) のように状態性動詞に「たら」を付けると、仮定的状況しか表すことができないという観察を示す。

- (21) a. そのことは本を読んだら分かるでしょう。 [仮定的状況]
- b. そのことはこの本を読んだら分かった。 [確定的状況]
- c. 時間があつたら、映画を見に行こうと思っている。 [仮定的状況]
- d. \*時間があつたら、映画を見に行った。 [確定的状況]

田窪はその理由を概略次のように説明している。状態性述語が表す事態は単調継続なので、事態の成立を確認する評価時  $t_1$  の 1 点においてその成立は確認可能であり、評価時の前後の状況を考慮する必要がない。このため状態性述語が表す事態は評価時においてその真偽が決定しており、タラを付けると仮定を表す。(21 c) を少し変えて、「時間があつたら、映画を見に行ったのに」のように過去の反実仮想を表す文にするとわかりやすいだろう。この場合、評価時は過去の時点  $t_1$  である。 $t_1$  において「実際には時間がなかった」ということは確定している。したがってタラを付けると仮定の一種である反実仮想になる。これにたいして非状態性述語は出来事の生起や状態変化を表し、出来事の生起前の状態・生起途中の状態・生起後の状態という複数の場面を必要とする。また非状態性述語が表す事態は評価時以後に生起する事態であり、評価時にその真偽は未決定である。「行く」を例にとって説明すると、「田中君は北海道に行く」は評価時である発話時以後に起きる事態を表す。このため非状態性述語にタラを付けるとまだ出来事の生起の真偽が確定しておらず、どちらの解釈も可能な条件文となる。(21 a) では文末の「でしょう」という推量表現によって事態「読む」は未生起となり仮定的状況を表す。(21 b) では「わかった」という過去表現によって事態「読む」は生起済みと解釈され確定的状況を表す。

田窪の観察は過去時制についてではなく、日本語の条件文に関するものであるが、条件文においても条件節 〈si P〉の処理では事態 P が成立するスペースへの心的アクセスが必要だと考えられるので、田窪の観察は時制解釈にも援用することができる。重要なポイントは、状態性述語はその成立・非成立を評価する時点  $t_1$  への 1 回のアクセスで確認できるのにたいして、非状態性述語 (運動述語) は出来事の生起前と生起後 (場合によっては生起中) の複数の場面にアクセスしなければならないという点である。

日本語には伝統的に「ムードのタ」または「叙想的テンス」と呼ばれる次の

ような過去の助動詞タの用法があり、現在でも成り立つ事態になぜタを用いるのかが議論されてきた。興味深いことに寺村 (1971)らが指摘するように、ムードのタはほぼ状態性述語に限られており、(22 c)のような運動性述語では不適格になるが、この現象も状態性述語と非状態性述語のアクセス方法のちがいに起因すると考えられる<sup>9)</sup>。

- (22) a. あっ、こんな所にあった。  
b. 君は確か広島の生まれでしたね。  
c. ??どこまで帰ったかね。

ではここまでの議論を踏まえて、本稿の冒頭に挙げた前島 (1997) の例文をもう一度見てみよう。次に再掲する。

(23) [= (2)] J'ai tourné la chaîne. Un flic { tirait / ??a tiré } sur une bagnole qui { prenait / ??a pris } feu. Sur une autre chaîne, l'OM { marquait / ??a marqué } son quatrième but. Sur la dernière, une grosse femme { engueulait / ??a engueulé } son bonhomme.

(24) [= (3)] J'ai pris le métro. Une fille { engueulait / \*a engueulé } son copain.

(25) [= (4)] J'ai pris le métro. Il y avait un bonhomme qui écrasait le pied d'une jeune fille. Elle a engueulé le bonhomme ! Elle criait tellement fort que l'autre a été obligé de changer de wagon.

短い(24)から検討しよう。第1文の *J'ai pris le métro*。によって場面は地下鉄の車内になり、解釈領域は空間的には車内の話し手に見える範囲、時間的には話し手が地下鉄に乗った過去の時点  $t_1$  に限定される。視点が  $t_1$  に移動し、 $t_1$  が情報のアクセスポイントとなる。地下鉄の車内の様子はそれまで語られていないので、 $t_1$  に先行する場面は存在しない（あっても話し手によって知覚されていない）。これは典型的な視野狭窄の状態である。(24)を発話する話し手は情報を想起するために過去スペースにアクセスするが、アクセスポイントとして利用できるのは  $t_1$  のみである。話し手が  $t_1$  への1度の心的アクセスによって取得できる情報は  $t_1$  において成立・非成立を確認できる状態性の事態に限られる。半過去 *engueulait* は未完了過去であり状態性の事態を表すが、複合過去 *a engueulé* は完了形であるために非状態性の出来事を表し、前場面を含む複数のアクセスを必要とする。このため(24)のように視野狭窄が起きていて  $t_1$  しかアクセスポイントとして利用できない場合には複合過去は用いることができないのである。一方、(25)では *Il y avait un bonhomme qui écrasait le pied d'une*

---

<sup>9)</sup> 日本語の叙想的テンスの詳細については東郷 (刊行予定)を参照されたい。

jeune fille. という文によって先行する場面が提供されている。このため後続する文では複合過去 *a engueulé* を用いることができる。

このような視野狭窄効果と状態性との関連は、日本語でも確かめることができる。次は本稿筆者の作例である。

(26) [誘拐され薬を嗅がされて気を失っていた]

- a. 気がつくと、真っ暗な部屋の中にいた。
- b. 気がつくと、手を {縛られていた / ??縛られた}。
- c. 気がつくと、男が私を {見ていた / ??見た}。

「気がつくと」はそれに先行する場面がないことを示す。この条件下では(26 a)の「いた」、(26 b)の「縛られていた」、(26 c)の「見ていた」のような状態性述語は適格だが、(26 b)の「縛られた」や(26 c)の「見た」のような非状態性述語は容認度が低い。これは(24)と同じような過去スペースへのアクセス制約が働いているためと考えることができる。

(23)も同じように説明可能だが、ここでは半過去を用いるとテレビの中の世界を表し、複合過去を用いると話し手がいる現実の出来事を表すという意味効果を合わせて説明する必要がある。おおむね次のような説明が可能である。

第1文の *J'ai tourné la chaîne.* にもし複合過去の文 *J'ai ouvert le frigo. J'ai bu un verre d'eau minérale.* を続けると、第2文と第3文の解釈領域は第1文と同一で、空間的には話し手がいる部屋の中で、時間的には第1文の事態の生起に後続する短い時間となる。ところが(23)では第2文以下が話し手の行動を述べるのではなく、TVに映った場面を描いていることから、第2文以下を解釈するためには解釈領域を変更しなくてはならない。話し手(および聞き手)はTVの中の世界へとワープするように入っていく。するとTVの中の世界に入った瞬間は、(26)の昏睡から目覚めた瞬間と同じく、先行場面が存在しない。このとき話し手(および聞き手)は、*J'ai tourné la chaîne.* が描く事態が生起する時点  $t_1$  を情報のアクセスポイントとして用いるが、そのときにアクセス可能な情報は状態性の事態だけであり、このために半過去 *tirait* を用いなくてはならないのである。もし複合過去 *a tiré* を用いると、第1文に続けて *J'ai ouvert le frigo. J'ai bu un verre d'eau minérale.* と述べた場合と同じく、解釈領域は第1文と同じままになるため、話し手がTVを見ている部屋の外(または内)で現実には警官が発砲したという解釈になってしまう。

前島は(23)から(25)の例文を説明するために、話し手と状況の交渉という操作概念を用いた。複合過去が使えるためには話し手がすでに状況に含まれ交渉が成立していることが条件であるとする前島の提案する制約は確かに興味深いものであるが、交渉が成立するための条件が明示されておらず、説明原理と

して不完全だと見なさざるを得ない。それに対して本稿が提案する説明は、解釈領域、情報のアクセスポイント、状態性述語の特性という3点を組み合わせることで、なぜ半過去しか使えないかという問題に整合的な説明を与えることができる。

本稿で提案した説明をもう一度まとめると次のようになる。

- (A) 話し手は過去の時点  $t_1$  に視点を移動させ、 $t_1$  を情報のアクセスポイントとして用いる。
- (B) 先行場面が存在しないとき、視野狭窄効果が起きて、話し手は  $t_1$  を評価時としてその瞬間に成立が確認できる情報しか取得することができない。
- (C) このため話し手が  $t_1$  において捉えることができるのは状態性の事態だけであり、これは半過去で表現される。複合過去は複数の場面へのアクセスが必要であるため用いることができない。

このように考えることで、次に挙げる半過去の持つ効果も十分に説明することができるだろう。

- (27) — Je... dit-il tout contre son oreille, et, à ce moment, comme par erreur, elle tourna la tête et Colin lui *embrassait* les lèvres. Ça ne dura pas très longtemps. (Vian, *L'Écume des jours*)

この半過去形 *embrassait* はふつう絵画的半過去に分類される。Bres (2005) ではこの例が巻頭に置かれ、若い頃にこの半過去に出会って衝撃を受けたエピソードが語られている。また同じくこの例を挙げた赤羽 (2006) はこの半過去の持つ意味効果について、文学研究者の立場から次のように述べている。

彼ら (=Colin と Chloé) の行動を支えている論理はここでも「気がかり」と呼ぶことが可能だろう。そしてためらいがちな二人の行動を越えて、彼らは一挙に *il embrassait* という、自分たちが望んでいた夢のような世界のただなかに一挙に身を置いているのである。「一挙に」という点を強調したい。それは偶然のようにして思いもかけない形で実現された行為であり、そうであるがため、そこには一瞬の陶酔はあっても、その中に長く浸るわけにはいかない。ここには断絶と飛躍がある。(赤羽 2006: 142)

赤羽が「一挙に」という点を強調し、この半過去に断絶と飛躍を見ていることに留意したい。Colin は意図的に Chloé にキスしたのではなく、彼女がたまたまその時に顔をこちらに向けたことによって、「気がついたらキスしていた」のである。もしここで *Colin lui embrassa les lèvres.* と単純過去を用いると、複合過去と同様に先行場面を持つことになり、断絶と飛躍という印象は生まれない。またここで動詞は運動性述語であることから、単純過去にすると Colin の意図的動作を表してしまい、「自分たちが望んでいた夢のような世界のただな

かに一挙に身を置いている」という意味効果は出ない。これは(26)の昏睡から覚めた瞬間の描写と同じである。

## 6. おわりに

本稿では以下のことを明らかにした。半過去の用法は図(7)で示した心的スキーマの発動様式に応じて、次のように分けられる。

i) 認識的半過去：単純型ではふたつの zone が、包括型では zone 2 のみが発動されるが、いずれの場合も過去への視点移動を伴わない知識表現であり、解釈領域は特定の時空間に限定されない。

ii) 知覚的半過去：zone 2 のみが発動され、過去への視点移動を伴う知覚表現である。このとき過去の時点  $t_1$  と知覚主体のいる空間に解釈領域を限定する視野狭窄効果が起きる。

次に情報のアクセスポイントという概念を用いて、知覚的半過去では過去スペースに心的にアクセスしなくてはならないが、1回の心的アクセスで取得できる情報は、評価時においてその成立・不成立が確認できる状態性の事態に限られると論じた。これが前島(1994)の挙げた例(2)(3)で半過去しか用いることができない理由である。

やや繰り返しになる部分もあるが、このときなぜ心的アクセスが複数回ではなく1回でなくてはならないかという点についてももう少し述べておこう<sup>10)</sup>。

ふつうフランス語では単純過去や複合過去で表される出来事性の事態(以下、かんたんに出来事と呼ぶ)は、時間軸に沿って展開・生起するものである。出来事が起きたことを認識し表現するためには、その出来事がまだ起きていない前場面を必要とする。Jean se leva à 7 heures. と言えるためには、まだ寝ていた7時より前の状況も把握し認識してはならない。このように出来事の表現のためには広い時間幅に包摂される多くの談話情報が必要とされる。その典型は物語で、物語を語るためには話の始まりから結末に至るまでの談話情報を保持してはならない<sup>11)</sup>。これは過去スペースに視点を移動し、視野狭窄が起きた状況で談話情報にアクセスしなくてはならない発話主体には不可能なことである。知覚的半過去の発話主体は知覚主体であり、知覚主体はその定義上、自らの視野に入るものしか知覚することができない。先にも用いた比喻を再び使うと、細く開けた障子の隙間から外を窺っているような立場に置

<sup>10)</sup> 本稿の査読委員の一人から「なぜアクセスが1回でなくてはならないのか」というコメントが寄せられた。最初の原稿では十分に意を尽くしていなかったものと思われる。コメントをいただいた査読委員に感謝したい。

<sup>11)</sup> 単純過去が語り手による談話情報の全体的保持を前提とすることは、東郷(2010)で示したところである。

かれた知覚主体が知覚できるのは「外は暗い」とか「雨が降っている」のような「状態性の事態」に限られる。そして状態性の事態は1回の心的アクセスで情報取得が可能なのである。

残された課題は多い。(6)に挙げた Tasmowski (1985)の次の例はそのひとつである。

(6) *Qu'est-ce qu'il pleuvait, n'est-ce pas ?*

話し手と聞き手のいる *discours* の半過去であることは明らかで、ならば Vogeleeer (1994)の分類に従うと単純型の認識的半過去になる。本稿ではこの場合、ふたつの *zone* が発動され過去への視点移動はないとした。しかし「いやあ、ひどい雨でしたね」という発話には、過去の経験を想起しているニュアンスがある。ならば話し手は発話時に過去スペースに心的にアクセスしているはずである。雨が降っていた過去の状況を共有している人のあいだでしか(6)は発話できないとする Tasmowski の観察は、話し手と聞き手の双方がアクセスする過去スペースの共有という条件に言い換えることができるかもしれない。

本稿の分析を絵画的半過去や切断の半過去に適応できるかどうかは今後検討が必要である。直感的には次の切断の半過去では、*deux jours plus tard* によって新たにアクセスポイントを設定し、半過去 *il mourait* で思いがけなく唐突に生じた事態を表していると言えそうではある。

(28) *Deux jours plus tard, il mourait.*

また次のような *imparfait commémoratif* も完了過去が予想される場所に半過去が用いられているという点でよく似た現象である。

(29) *Il y a cinq ans Elizabeth Sheneider nous quittait.*

この文は今から5年前に E. S.が死んだことを言明しているのではなく、友人たちにその事実を想起してくれと述べている。運動性述語の場合、あらたな言明には複数の場面を必要とするが、想起は過去スペースへの1回のアクセスで十分である。これはロシア語で「なんてここは蒸し暑いんだ。せめて窓を開けておいてほしかったね」「でも俺はさっき開けたんだよ」ように何かを確認する場合に、下線部に不完了体が用いられるのと平行的である(三谷 2001)。ただしこれらはいずれも今後の課題としておきたい。(京都大学)

[参考文献]

阿部 宏 (1987)「フランス語の半過去について」『フランス文学語学研究』6 (早稲田大学), 31-41.

赤羽研三 (2006)「語りの流れと切断」『仏語・仏文学論集』41 (上智大学), 123-147.

- Berthonneau, A.-M. & G. Kleiber (1993), “Pour une nouvelle approche de l'imparfait : l'imparfait. un temps anaphorique méronomique”, *Langages* 112, 55-73.
- Bres, J. (2005), *L'imparfait dit narratif*, CNRS Editions.
- Cannings, P. (1978), “Definiteness and relevance : The semantic unity of *il y a*”, M. Suñer (ed) *Contemporary Studies in Romance Linguistics*, Georgetown University Press, 62-89.
- Le Bidois, R. & G. Le Bidois (1935-38), *Syntaxe du français moderne*, Editions A. et J. Picard et Cie.
- Le Guern, M. (1986), “Notes sur le verbe français”, Rémi-Giraud, S. et al. (eds) *Sur le verbe*, Presses Universitaires de Lyon, 9-60.
- 前島和也 (1997) 「時制と人称 : 半過去の場合」『慶應義塾大学日吉紀要フランス語フランス文学』 25, 117-144.
- 三谷恵子 (2001) 「ロシア語の「体」の研究史」、つくば言語文化フォーラム編『「た」の言語学』 ひつじ書房, 1-60.
- 小熊和郎 (2002) 「半過去と〈境界〉の消失」『西南学院大学フランス語フランス文学論集』 43, 127-159.
- Recanati, F. (1996), “Domain of discourse”, *Linguistics & Philosophy* 19, 445-475.
- 定延利之 (2004) 「ムードの『た』の過去性」『国際文化学研究』 21, 1-68.
- Sten, H. (1952), *Les temps du verbe fini (indicatif) en français moderne*, Ejnar Munksgaard.
- Tasmowski, L. (1985), “L'imparfait avec et sans rupture”, *Langue française* 67, 59-77.
- 田窪行則 (1993) 「談話管理理論から見た日本語の反事実条件文」益岡隆志編『日本語の条件表現』 くろしお出版, 169-183.
- 寺村秀夫 (1971) 「‘タ’の意味と機能—アスペクト・テンス・ムードの構文的な位置づけ」『岩倉具実教授退職記念論文集—言語学と日本語問題』, くろしお出版, 331-358.
- 東郷雄二 (2007) 「Je t'attendais. 型の半過去再考」『フランス語学研究』 41, 1-15.
- 東郷雄二 (2008) 「半過去の照応的性格 — 連想照応と不完全定名詞句の意味解釈から」『フランス語学研究』 42, 17-30.
- 東郷雄二 (2010) 「談話情報管理から見た時制 — 単純過去と半過去」『フランス語学研究』 44, 15-32.

- 東郷雄二 (2012) 「時制と談話構造 — 同時性を表さない半過去再考」『フランス語学研究』 46, 51-67.
- 東郷雄二 (刊行予定) 「半過去形の叙想的テンス用法」, 春木仁孝・東郷雄二 (編) 『フランス語学の最前線』 2, ひつじ書房.
- Vetters, C. (1996), *Temps, aspect et narration*, Rodopi.
- Vogeleer, S. (1994), “Le point de vue et les valeurs des temps verbaux”, *Travaux de linguistique* 29, 39-58.